

こころ

令和2年(2020)・12月
編集発行 富山県教育委員会



「太陽トラック」小学校(砺波市)

巻頭言「新しい指導・支援様式を考える」

富山県特別支援学校長会会長
富山県立しらとり支援学校校長 政二 里佳

新型コロナウイルス感染症の発生から約1年。新しい生活様式が社会に浸透し、子供たちのマスク姿が当たり前になった。学校では、学習保障への対応や三密対策、指導計画の変更、行事の精選等、これまで経験したことのない対応に追われている。

本校は、知的障害のある児童生徒が学ぶ学校であり、学習や生活上の支援、安全管理上の対応のため、教員と児童生徒の密接や密着が避けられない。マスクの着用が難しい児童生徒もあり、教員は緊張感をもった日々を過ごしている。

反面、新型コロナウイルス感染症への様々な対応は、これまでの教育活動を見直す契機となっている。本校では、「今まで当たり前に行っていた密接を伴う支援を自立の観点から見直す」

「三密対策を児童生徒の自立につなげる機会と捉え、他者との適切な距離の取り方や声の大きさの指導、手洗い等の衛生概念の形成等に生かす」「行事の準備や事前学習等に充てていた時間を日々の学習活動の充実で充て、個別の教育支援計画や個別の指導計画の目標達成を図る」ことなどに取り組んでいる。

三密対策は、学校における環境改善にもつながっている。小学校に通う1年生の保護者の方から次のような話を伺った。その方のお子さん

には発達に気になるところがあり、多人数の教室で落ち着いて学習できるか保護者の方は不安に思っていた。臨時休校が長引き、不安はさらに募ったが、学校が再開されて間もなく、お子さんが、「学校、分かりやすいよ。楽しいよ」と話してくれたそうである。理由を聞くと、「どこに並べばいいの、線を見れば分かるよ」「どこを通ればいいの、矢印の上を歩けば分かるよ」「ばいきんテープのあるところを触ったら、手を洗うことが分かるよ」「みんな小さい声で話すからうるさくないよ」とうれしそうに一つ一つ教えてくれたとのことである。これまで困っていたことや分からなかったことが三密対策のための環境設定によって解消され、学校が分かりやすく安心して過ごせる場所となった。これらの対策は、どの児童にとっても分かりやすいルールのものであり、学校生活におけるユニバーサルデザインであるといえる。

学校には様々な個性や特性のある児童生徒が学んでいる。誰もが安心して楽しい学校生活を送り、成長できるよう、これまで当たり前だと思っていた指導・支援や環境を見直し、「新しい指導・支援様式」を探っていくことの大切さを考えさせられる1年となった。

1 はじめに

本校の知的障害特別支援学級の児童は、生活年齢も発達年齢も様々である。そのため、一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程を編成している。「自立活動の時間」は一人一人に応じて週に1～3時間設定しており、そのうち1時間は集団で行うことによるコミュニケーションの力の向上をねらい、全員で行っている。能力差が大きい7人の児童で行った「きいて動こう！動いて感じよう！」（8時間）の実践を紹介する。

2 取組の実際

(1) 自立活動年間指導計画の作成と単元の設定

観察を通して児童の実態把握を丁寧に行い、自立活動の区分に即して整理した。その上で目標を設定し、年間指導計画を作成した。本単元は、自立活動の6区分27項目の「5 身体の動き(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること」を重点にしつつ、「3 人間関係の形成(4)集団への参加の基礎に関すること」「4 環境の把握(5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること」もねらいとした。どの児童も体を動かすのが好きなことを生かし、本単元「きいて動こう！動いて感じよう！」を設定した。

<学習活動の流れ>

- 1 並んで活動場所へ移動する。
- 2 学習の流れを確認する。
- 3 体験トレーニングに取り組む。
- 4 「きいて動こう！」に取り組む。
- 5 「動いて感じよう！」に取り組む。
- 6 教材・教具を片付け、並んで教室へ移動する。

(2) 集中力を鍛え、概念の形成を図る「きいて動こう！」

活動場所に様々な色や形の教材を広げ、「赤くて丸いものを3つ持ってきて」などの指示をした。児童の実態に合わせ、聞く観点を1～3つに使い分けた。また、「一度しか言わないよ」と宣言しておくことで、普段は全体への指示を聞き逃すことが多い児童も注意深く聞き取ろうとする姿勢が見られた。さらに、「野菜の色の物を持ってきて」と多様な答えが予想できる指示を出すことで、にんじんはオレンジ、ナスは紫、ピーマンは緑と概念の形成を図ることができた。発語のない児童には、野菜一覧シートを指差すことで発表できるようにした。ゲーム感覚で取り組むことができ、児童は楽しさを感じていた。



(3) 社会性、身体意識、空間意識を育む「動いて感じよう！」

色や形、感触が様々で児童の多様な動きを引き出すことができると考え、トンネル、トランポリン、大型カラー積み木、平均台、ロープ、ビーンズバック、スカーフ、飛び石マット等の教材・教具を用意し、一人に一つ選んで、「あったか道」（サーキットコース）を作った。「一人一つだけ」とすることで、各自の使いたい物が重なり、相談が必要になる。教師が見守り、適宜支援することで、言葉でやり取りをしたり



じゃんけんで決めたりすることができるようになっていった。思い通りにならなくても気持ちをコントロールして活動が続けたり、相手を思いやった言動があったりすれば、その場で褒めて認めるようにした。

でき上がった「あったか道」では、声をかけ合い、楽しそうに体を動かす様子が見られた。トンネルでは、壁にぶつからないように体を動かすことができるようになっていった。大型積み木をトンネルにしたり、椅子にしたり、ベッドにしたりして、バランスを保って動く様子が見られた。このように、体の多様な感覚・知覚を働かせて動くことで、身体意識や空間意識が養われ、自然な体の動きへとつなげることができたと考える。また、自分が作った「あったか道」で遊ぶ友達の様子を見て、うれしい気持ちになったり、次回はより喜んでもらえるものを作りたいという意欲をもったりすることができた。話し合って折り合いを付けたり、相手を意識したりするなど社会性を伸ばすこともできたと考える。

3 終わりに

自立活動は、実態把握から具体的な指導内容を設定するまでに時間がかかる。しかし、一人一人の教育的ニーズを明確にすることで、指導内容がはっきりしてくる。このことを踏まえつつ、一人一人がよさやもてる力を発揮できるように単元を構成し活動内容や指導方法を工夫することで、能力差があっても全員で取り組むことができた。また、集団で活動することにより、他者との関わりの中で満足感や達成感を感じ自己肯定感を高めることができ、人間関係の形成やコミュニケーションの力を効果的に向上させることができた。

自立活動は、単元構成や指導方法、教材・教具に自由度があり、単元の設定は教師の楽しみである。何より、児童が「できた！」を感じたときの笑顔は教師の喜びでもある。これからも児童の「できた！」の笑顔を目指して、自立活動に取り組んでいきたい。

互いのよさを感じ合い、仲間と楽しむ造形遊び

— 知的障害特別支援学級における図画工作科の取組 —

高岡市の小学校

1 はじめに

知的障害特別支援学級での図画工作科において、手先を使う作業が苦手な児童が楽しく活動できる題材はないかと考え、洗濯ばさみを使った造形遊びを行うことにした。ここでは、自分や友達の活動のよさを感じながら、楽しく活動することを目指して取り組んだ実践を紹介する。

2 取組の実際

(1) 主体的に取り組むための手立て

洗濯ばさみは、「挟む」以外にも「立てる」「並べる」等の様々な使い方ができ、学年を問わず操作しやすい材料である。また、何度でもつくり直すことができるため、児童は安心して自由にイメージを広げることができる。教室には、「つなぐ」「並べる」等、洗濯ばさみの用途を生かした作品の写真を「ヒントカード」として掲示し、多様な造形活動のための手がかりとした。また、パステル調の6色の洗濯ばさみを1800個用意したことで、発想を広げ、色の組合せを工夫することができた。さらに、教室の中に色画用紙を並べたことで、夜空の花火や海の中の生き物のように、一人一人が好きな場所を選んで作品づくりを楽しむことができた。



【黒シートの上に「夜空の花火」を表現する様子】

(2) 協働的に学び合う場の設定

本単元では、洗濯ばさみのつなぎ方や色の組合せを楽しむことができるように、一人一人が材料で遊ぶ時間を十分確保した。次に「なかよし教室を洗濯ばさみで変身させよう」と投げかけ、ダイナミックな造形遊びができるように、網、人工芝、黒シート、段ボール箱、色画用紙等を教室全体に配置した。全員で協働して教室を変身させる場を設定したことで、友達と関わり合いながら活動することができた。



【網につるして「海の中の生き物」を表現する様子】

(3) 互いのよさを認め合う「いいねタイム」

友達の作品を鑑賞し合い、「いいね」と思ったところに「いいねカード」を置く活動を取り入れた。さらによいと感じた理由を伝え合う時間「いいねタイム」も設定した。どの児童も「いいねカード」が置かれた場所に注目し、うれしそうに話を聞いていた。活動を十分に楽しんだ児童は、友達の作品のよさにも関心をもち、互いに認め合うことができた。

3 終わりに

洗濯ばさみは、作品づくりに不安感をもつ児童や感情のコントロールが苦手な児童が、「失敗しても大丈夫」と安心して活動し、造形遊びを十分に楽しむことができる題材であった。振り返りの場面では、互いの活動のよさを見付け、認め合う姿も見られた。年間を通して「いいねカード」を活用することで、様々な場面で一人一人のよさを共有できるようにし、自己肯定感を高められるようにしていきたい。

特別支援教育における

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

平成 29 年 3 月に告示された小・中学校学習指導要領及び、平成 29 年 4 月に告示された特別支援学校小学部・中学部学習指導要領では、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが示されました。特別支援教育においても、障害の状態等に留意しながら、「主体的・対話的で深い学び」の視点を持ち、授業改善の取組を活性化していくことが求められています。

○各教科等の指導に当たっては、次のような配慮が必要です。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること

が偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。



各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた見方・考え方が鍛えられていくことに留意し、児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

授業改善の視点

引用・参考：特別支援学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 平成 30 年 3 月 開隆堂

主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

対話的な学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

具体的には…

引用：NITS 独立行政法人教職員支援機構 <https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/pictogram.html>

主体的な学び

- ・興味や関心を高める
- ・見通しを持つ
- ・自分と結び付ける
- ・粘り強く取り組む
- ・振り返って次へつなげる

対話的な学び

- ・互いの考えを比較する
- ・多様な情報を収集する
- ・思考を表現に置き換える
- ・多様な手段で説明する
- ・先哲の考え方を手掛かりとする
- ・共に考えを創り上げる
- ・協働して課題解決する

深い学び

- ・思考して問い続ける
- ・知識・技能を活用する
- ・自分の思いや考えと結び付ける
- ・知識や技能を概念化する
- ・自分の考えを形成する
- ・新たなものを創り上げる

授業改善のための工夫の例

参考：季刊 特別支援教育 No. 77 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編 令和2年3月 東洋館

主体的な学び

学習の見通しがもてるように、言葉とイラストで活動内容を表したカードで流れを示す。

作業の手順を絵や写真と言葉で示したカードを用意して、自分でやり方を確認しながら取り組むことができるようにする。

生活に身近な題材を扱う、好きなことや得意なことを取り入れるなど、興味・関心をもって取り組むことができるようにする。

自己選択、自己決定できる場を設定することで、意欲を高める。

自分の思いを言葉で表現する際に、手掛かりとなる言葉カードや写真を掲示する。

活動内容や感想だけでなく、何が分かったか、今日の反省点を次の授業にどう生かすかなど、授業の目標に基づいて振り返りを行う。

対話的な学び

友達の発表を聞く際に、どの点を評価したらよいのか、観点が明確になるようにチェックリストを用意する。

友達の意見を聞いた後に、「いいねカード」を渡し、どこがどのようによかったかを伝える場を設定する。

グループ内で発表練習を聞き合い、互いのよい点や課題点を伝え合う場面を設定することで、より伝わりやすい発表内容を考えられるようにする。

図工で友達の作品を鑑賞する際に、自分の作品と比べながら、友達の工夫に気付くことができるようにする。

相手に自分の考えを伝わりやすくするために、声の大きさ、話すスピード、姿、会話のルール等を示しておき、自分で確認できるようにする。

深い学び

「何を学習したか」「何が分かったか」「何ができるようになったか」「これからどのような場面でそれを使うか」といった視点で振り返るようにする。

タブレット端末で発表の様子を録画しておき、振り返りの際に見て、どこを改善すればよいか気づくことができるようにする。

図工で立体作品を作る前に、絵に描いてみることで、どんな特徴があるか、何色にするかなど思いや考えを基にイメージを膨らませることができるようにする。

学習して分かったことや興味をもったことについて、インターネット等を活用してさらに調べたり、関係者に聞いたりして、探求・追求していくようにする。

日頃の授業に取り入れて、授業改善に取り組んでみましょう！



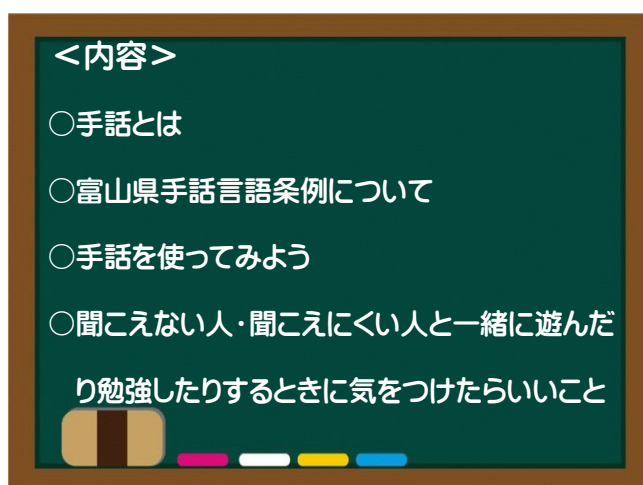
「みんなで手話を知ろう 手話を学ぼう」の活用について

平成30年4月1日に施行された「富山県手話言語条例」に基づき、学校における手話の普及を促進するため、小学生向けのスライド教材「みんなで手話を知ろう 手話を学ぼう」を作成し、今年度4月に配布しました。

本教材は、手話言語条例の理念や手話について理解したり、聴覚障害のある友達との関わり方を知ったりすることのできる内容です。総合教育センターのホームページ「教育資料（特別支援教育）」からダウンロードしていただき、総合的な学習の時間や特別活動等において活用していただけるようお願いいたします。



スライド教材「みんなで手話を知ろう 手話を学ぼう」より
(以下同じ)

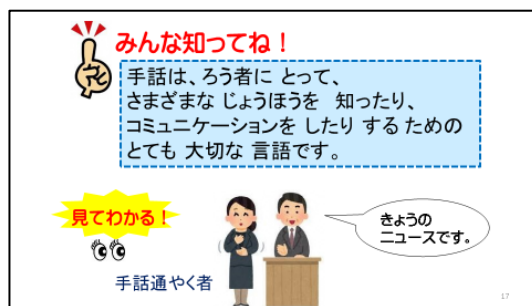


活用例1 総合的な学習の時間

【ねらい】聴覚障害や手話について知り、調べ学習や体験活動を通して理解を深め、自分たちにできることは何かを考える。

【展開】

- ① スライド教材を見て、聴覚障害について知る。
- ② もし自分たちの耳が聞こえなかったら、どんなことが困るかを考える。
- ③ 地域の社会福祉協議会や手話サークル等から講師を招き、聴覚障害の方が生活において工夫していることや、手助けしてほしいことについての話を聞いたり、手話を体験したりする。
- ④ 気になったことや興味をもったことについて、本やインターネット等でさらに調べる。
- ⑤ みんなが幸せに暮らしていくために、自分たちにできることについて考え、まとめる。



活用例2 学校行事

【ねらい】手話について知り、調べ学習や体験活動を通して手話に親しむ。



【展開】

- ① スライド教材を見て、簡単な手話を知る。
- ② 手話についてさらに調べ、簡単なあいさつや手話を使った歌等を覚える。
- ③ 異学年交流で下学年の児童に教えたり、集会で発表したりする。

活用例3 国語科

【ねらい】 4 学年国語科「だれもがかかわり合えるように」を通して、かかわり合いについて考え、自分自身で課題を探し、進んで調べたり友達に分かるように発表したりする。

【展開】

- ① 資料「手と心で読む」を読み、もっと知りたいことについて話し合い、学習課題を設定し、学習計画を立てる。
- ② 聴覚障害について調べるグループは、スライド教材を見て、聴覚障害をもつ人のコミュニケーションについて知る。
- ③ さらに知りたいことについて、本やインターネットで調べたり、地域の社会福祉協議会に行つて取材したりする。
- ④ 調査したことの中から、伝えたいことを明らかにして、構成を考え、原稿を書く。
- ⑤ 「かかわり合い」についての発表会で発表し、感想交流をする。

活用例4 学級活動等 ～聴覚障害について理解するための学習～

【ねらい】 難聴の友達の聞こえ方や適切な援助等について理解し、学級の仲間として、協力してよりよい生活を築こうとする。

※障害理解についての学習は、本人・保護者の了解を得た上で、目的や具体的な内容等を相談しながら進めることが大切です。難聴特別支援学級や聴覚障害特別支援学校の教員から助言を得るのもよいでしょう。

【展開】

- ① 聞こえにくい状態を体験し、感想を話し合う。
- ② スライド教材を見て、聞こえにくい人の生活や困っていることについて知る。
- ③ 学習を通して考えたことや感想を話し合う。



手話言語条例については、「特別支援教育とやま『こころ』第 110 号」（令和元年 12 月発行）でも特集しています。是非参考にしてください。

手作り教材紹介

○学校生活の習慣が身に付く「システム」／困ったときの「お助けカード集」

小矢部市の中学校 知的障害特別支援学級

ねらい 口頭での説明の理解や生活習慣の定着が難しい生徒に対し、生活パターンを確認したり、困ったときにカードで見返したりできるようにすることで、身の回りのことに自分から取り組むことができるようにする。

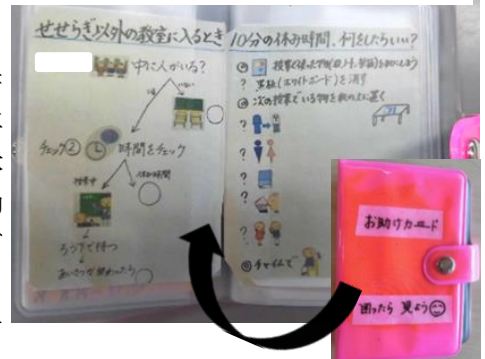
1 学校生活の習慣が身に付く「システム」



一日の生活について場面毎の活動の流れを分かりやすく示し、達成したらチェックシートにシールを貼る。シールが40個たまると、日本地図に生徒が好きな芸能人の写真を貼る。生徒は「〇県で有名な人は誰かな？もう少しで40個になりますね。楽しみです。」と各都道府県出身の芸能人の写真が貼られるのを楽しみに毎日の活動に意欲的に取り組んでいる。達成できたことを教師が認め褒めていくことで、生徒の自信につながっていくものと考え、実践している。

2 困ったときの「お助けカード集」

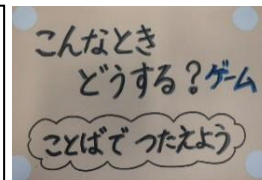
生徒は名刺サイズのカードケースを常にポケットに携帯している。ケースの中には、職員室への入り方、全教職員の写真と名前の表、各教科の担当教師の写真と名前、校内地図、休み時間にすること、困ったときの対処法、行事の担当係や活動場所等のカードが入っている。生徒は分からないことはカードを見て確認しながら安心して生活している。覚えられないこと、心配なことがあったときには、新たにカードを作り、ケースに加えるようにしている。



○場面に応じた話し方を考えるための支援「こんなときどうする」～役割演技～

入善町の小学校 通級指導教室

ねらい 自分の思いを優先しマイペースな行動を取る児童に対し、日常生活における課題場面の状況を理解し、自分の思いを言葉で伝えることができるようにする。



—目当てをもった活動—

思いを伝えるときの「相手の顔を見る」「はっきりと言う」「あったか言葉を使う」など、大切なポイントを目当てにする。

—ゲーム形式—

どんな場面か、どうしたらよいかを考えて、適切な言動を考えて演技する。その様子を教師がタブレットで撮影し、相手の顔を見ていたことや大きな声で話したこと等の行動のよさを一緒に確認する。

—その活動後の般化—

活動後、振り返りカードを綴ったまなびファイルで担任等と連携を図る。教師が本人の頑張りやよさを伝えることで、自己肯定感を高めるようにする。また、教師が本人への声かけのポイントを理解し、実際の場面での指導に生かすようにしている。

「こんなときどうする?」の学習の流れ

- ① 場面絵カードを引く。
(勝手な行動、問い掛けに反応等)
- ② どんな場面かを説明する。
- ③ どうしたらよいかを考える。
- ④ 考えを発表する。
- ⑤ ロールプレイ (撮影) する。

